

a 学校教育目標		学びに向かい、心豊かで、健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校															
評価計画								自己評価				改善方策		学校関係者評価							
c 中期経営目標		d 短期経営目標		e 目標達成のための方策		f 評価項目・指標		g 目標値		10月 h 達成値	2月 h 達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析		n 改善方策		l 評価			m コメント
																		イ	ロ	ハ	
確かな学力	確かな学力の育成(かしこく)	授業力の向上		○対話を生み出す発問の検討 ○「児童同士が発言をつないでいる」、「視点に沿って振り返りを書いている」等の視点による授業評価票を活用した授業改善 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握、分析、改善策検討		○授業評価票「児童同士が発言をつないでいる」、「視点に沿って振り返りを書いている」の評価項目の平均ポイント3.6(4段階評価)以上の職員の割合 ○児童アンケートの肯定的評価の割合		8月80% 12月85%		90.0%	90.5%	106.4%	A	・授業評価票「児童同士が発言をつないでいる」、「視点に沿って振り返りを書いている」の指標3.6に対して、項目の平均は88.5%であった。 「児童同士が発言をつないでいる」の項目の平均は88%、「視点に沿って振り返りを書いている」の項目の平均は89%であった。平均としては、前回より1.5%低くなっており、目標値を達成することができなかった。友達の考えに対して発言をつなげることが難しい児童、振り返りを書けるが視点に沿っていない児童等、個別の課題も見られた。 ・児童アンケートの肯定的評価の割合については、92.5%であった。友達の考えにつなげて発言していると回答した児童、視点に沿って振り返りを書くことができたと回答した児童ともに数値が向上しており、どちらについても自信をもって取り組むことができるになったと考えられる。 アンケートの結果、児童自身の評価は高かったが、教師の見取りとの差があることも分かった。		・各授業者は、研究授業を通して、問いの持たせ方やファシリテートの仕方などを学び、授業改善につなげようとしていた。今後も、学んだことを次へつないでいくという方法は継続していく。また、児童が友達の考えにつなげて発言できるようにするために、教師が反応例を活用することを児童に促したり、交流の際のファシリテートを積極的にに行ったりしていく。 ・多くの児童は、アンケートにおいて、授業中に発言をつなぐこと、視点に沿って振り返りを書くことができるようになったと回答しているが、2項目とも課題の見られる児童もいるのが現状である。教室に掲示している反応例を自分で選択して活用させたり、視点に沿った振り返りとなっているか考えさせたりすることを通して、課題の克服につなげていく。		○			・話型の定着により対話のある授業改善が進んでいる。学習規律の一層の定着を期待する。 ・先生や友達の話をしっかり聞いて考える児童が増えている様子からも成果につながっていることが分かる。 ・学んだことを自分なりの言葉で表現することは大した。 ・学習する楽しさを児童が感じる取組を引き続き継続してほしい。
		基礎学力の定着		○学力向上に向けた計画的、効果的な取組の実施及び個への支援手立てと授業改善策の検討 ○学力調査分析事業の活用 ○家庭学習をやり切らせる指導とICT活用による家庭学習の実施		○算数科・国語科単元末テスト通過率		87%		85.0%	83.3%	96.0%	B	・算数科・国語科の単元末テストの平均点は83.3%であり、目標値を達成することができなかった。算数科は知識が86.6%、思考・判断・表現が76.6%、国語科は知識が85.1%、思考・判断・表現が84.7%であった。算数科の思考・判断・表現が前回より5%低くなっており、本校の大きな課題である。		・これまで、研究授業での課題を生かした授業改善や、アシストシートによる復習、児童同士の対話などにより、児童の思考力・判断力・表現力の育成を目指していた。しかし、算数科の数値の向上に結び付いていないため、問題文の読み取り、説明など、課題部分に絞って復習に取り組む体制づくりをしていく。また、授業の際、児童が問題の意図を理解した上で取り組むことができるよう、問題分析の際には、教師からの切り返し発問や、焦点化を行い、問題を把握する時間をとるようにしていく。		○			・目標値に達していない児童が、なぜ到達しなかったのかを誤差分析等を行い明らかにして、取組を充実させることを期待する。 ・個に応じた指導を継続してほしい。
豊かな心	豊かな心の育成(優しく)	ふるさとを愛する心情の育成		○生活科、総合的な学習の時間を中心とした地域人材・地域教材を活用した授業を推進し、地域への愛着・感謝の心を育てる。		○学校アンケート「小泉の地域の役に立つ行動がしたい」肯定的評価4の児童の割合		85%		91.0%	90.0%	106.4%	A	・アンケート「小泉の地域がすきですか」に対して、肯定的に評価している児童は90%であった。 ・これまでに、1・2年生が民生委員の方々や保護者の協力のもと、「さつまいもの苗植え」を行ったり、生活科の中で地域の方々や保護者の協力のもと田植え体験等を行っている。2年生は「さくら荘」に行きパンを作る方々の思いを学んだ。5年生は、総合的な学習の中で「里芋の観察等の農業体験」で地域の方を講師として学習活動を行った。6年生は、白滝園を訪問し、小泉太鼓の演奏を披露している。9月からは地域の方が子ども達に読み語りを来てくださり、読書活動を推進している。地域の方々や保護者の方々の力が支えとなった学習活動が成果につながっていると考える。		・今後も、「いもほり」や「稲刈り体験」、「農業体験」等地域人材・地域教材を活用した授業を積み重ねていく。小泉町には白瀧山や遺跡等活用できる資源が多くある。それらの資源を生かした学習活動を開発していく。また、小泉の地域の一人としてできることを自分事として考えさせたり、表現する場(行動する場)を設定したりして地域への愛着・感謝の心を育て、自己有用感の向上にもつなげていく。		○			・自分が住んでいる地域を好きだと感じる児童が多いことが喜ばしい。今後も地域の力を大いに活用して学習活動を充実させてほしい。 ・今年度積み重ねてきた学習活動等を今後の取組に生かしていき深まりのある学習活動が行われることを期待する。 ・地域の資源を有効に使い、「小泉小学校だからことできる取組」を行うことで児童の郷土愛をさらに育ててほしい。
		児童の自己有用感の醸成 チャレンジする心の育成		○「小泉小5つの宝」(①ほかほか言葉②時間を守る③トイレのスリッパ揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行)の児童による取組推進及び改善実施 ○ハイパーQUや定期アンケートの評価による成果と課題把握、分析、改善策検討		○「小泉小5つの宝」のうち重点強化週間振り返りにおける児童の肯定的評価 ○ハイパーQU(6月中旬、1月下旬)分析による学級生活満足群の割合で評価		85% 70%		94% 62%	95% 78.2%	112% 112%	A	・学校アンケート「学校で先生やお客さんに気持ちのよい声であいさつをしていますか」の項目に98%、「あなたは時間を守ることができていますか」の項目に92%の児童が肯定的な回答をした。要因としては、児童会を中心とした生活目標遵守の呼びかけや、各学級で小泉小5つの宝に関する指導をお手本となる児童を中心に、継続して粘り強く行ったことが考えられる。 ・1月実施のハイパーQUにおいて学校生活満足群に属する児童は78.2%だった。要因としては、1回目の結果から、各学級で学習環境の改善やルールづくりを行い、児童が安心して学習に取り組める環境を整えたことが考えられる。個別での指導が必要な児童に関しては確実な引き継ぎを行い、来年度以降も効果的な指導・支援を行っていくことが望ましいと考える。		・本年度に行ってきた児童会を中心としたさまざまな活動を来年度以降も改善しながら実施していくとともに、望ましい行動をしている児童を肯定的に評価していくことで、児童の更なる意欲向上を図る。また、各学級での指導の足並みを揃え、学校単位で一丸となった指導を継続して行っていくことが必要と考える。 ・全体の平均値は6月と比較すると向上しているが、各学級で見ると満足群の割合が前回とほぼ同様か悪化している学級も見受けられる。また、満足群の割合が高い学級の児童の中にも支援を必要とする児童は点在しており、このような個別での支援が必要な児童を取りこぼすことなく、学校全体で指導・支援していくことが必要と考える。また、来年度以降も確実な引き継ぎを行い、児童に対する学校のかかわりが変わるような取り組みが必要がある。		○			・「小泉の地域が好き」と回答した児童の好きな理由を分析するとよい。児童がどんな学びをしたのかが明確になり、次への取組に生かすこともできると考える。 ・児童会等高学年が自主的に行動している取組がよい。 ・「児童と教職員の関係性」と「児童同士の関係性」がよりよいものとなる取組を期待する。 ・児童の不安要因等を丁寧に分析し、取組をすすめてほしい。
健やかな体	健やかな体の育成(たくましく)	運動意欲の向上		○アンケートの結果分析による課題分析をし、取組内容の決定と実施 ○体育科における運動遊びの実施 ○休憩時間等を活用した学級遊びの取組実施		○運動やスポーツが好きな児童の割合		7月 85% 12月 90%		94.0%	98.0%	110.6%	A	・運動やスポーツが好きな児童の割合は98%で10月から4%増えた。これは、体育科における運動遊びの実施や、各学級で担任による外遊びへの声掛け、保健体育委員によるがんばり朝会での運動遊びの実施等による成果と言える。 ・各学級でレクリエーションを実施したり、屋外で遊ぶ道を設定したりするなど、児童が楽しんで外遊びができるよう取組を行った。 ・児童会による、休み時間を使った異学年での運動遊びを2回実施した。 ・高学年では委員会活動等、しなければならない活動が増え、休憩時間以外遊びの時間を割くことがあまり出ていない実態がある。		・体育科授業の最初に、活動に関連した運動遊びを取り入れることを継続して行っていく。 ・児童が様々な運動や運動遊びに慣れ親しみながら、今年度体力テストの課題である「柔軟性」「腹筋」の力を高められるように、がんばり朝会の実施種目を工夫していく。 ・継続して、保健体育委員によるがんばり朝会での運動遊びを児童主体で行っていく。また、児童会による縦割り班遊びの時期や活動内容について連携をとることで、児童が定期的に異学年と様々な運動遊びを行えるようにする。 ・各学級での運動遊びを最低でも学期に1回は取ることができるよう、声掛けを行う。		○			・体を動かすことが好きな児童が多いことは喜ばしい。 ・教職員も児童とともに体を動かすことに取り組んでいることも成果の一つであると考ええる。 ・運動することが好きになる取組を今後も継続してほしい。
		体をつくる		○給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようとする児童の育成 ○食に対する感謝の気持ちを醸成する指導、取組実施		○学校アンケート「給食は自分で決めた分量を食べていますか」の肯定的評価		90%		94.0%	97.0%	107.8%	A	・完食の取組として、もぐもぐ給食週間を設け「もぐもぐシールラリー」と、「もぐもぐ給食ニュース」を児童主体で行う事により、「自分で決めた量の給食を食べている」と答えた児童は、9%と1学期より3ポイント多かった。完食の取組で、5日間完食を達成できた児童も85.1%と1学期よりも2.3ポイント高かった。 ・小泉の里芋が給食に出る日に、地域の生産者さんへのインタビューを生放送したり、「野菜たっぷりベリ〜グー」を合言葉に、野菜の必要性を紹介したりする事で、食材等への感謝の気持ちが高まった児童は100%だった。		・自分で決めた量を食べることは出来る様になってきたが、一方で苦手なものを極端に減らす児童もいる。今回は、苦手な人が多い野菜に焦点を当て、一食で食べた方がよい野菜の量を合言葉にして、児童が自分で食べた方がよい量が分かるように工夫し、取り組んだ。今後も、様々な視点で、作っていた給食を、携わる人や食材に感謝していただくことが出来るような取組を児童とともに考え、実践していく。 ・取組期間中、栄養教諭に食育指導をしていただいたり、生産者さんのインタビューを実施したりしたことで、より学習が深まった。来年度も様々な方と連携しながら、食育を推進していく。		○			・児童が自己決定した量を完食する取組は大切だ。 ・生産者の思いに触れる活動を取り入れたことも成果につながっている。 ・児童がどんな気持ちで教職を食べているか分析していくのも次への取組につながっていくと考える。
信頼される学校	信頼される学校づくり	発信する		○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りの発行		○保護者アンケートにおける「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思われますか」の肯定的評価		85%		94.0%	98.0%	112.9%	A	・学校便りや学級通信等で保護者に配信してきた。学校便りは保護者を通して地域への回覧も行っているが、2か月まとめて回覧となった月もあった。 ・「学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思いますか」のアンケートに対して肯定的評価は98%であった。日々の取組を丁寧に取り組んでいることの成果だと捉えている。		・今後も定期的な発行を行い、児童の様子を保護者に発信していく。 ・学年便り等でも児童の具体的な姿を発信したり、学級懇談会でも学校の取組や児童のがんばり等を伝えたりして、保護者との連携を大切にしながら日々の教育活動を進めていく。また、保護者の願いに応えた教育を行っていないと感じている保護者の思いも受け止め、教職員間で連携しながら取組を行っていきたい。		○			・今後も児童の様子や学校の取組を保護者や地域に積極的に発信してほしい。
		組織の活性化と効果的な教育活動推進		○学校経営会議を核としたベクトルを揃えた取組実施 ○各部会(研究推進部、生徒指導部、保健体育部)における進捗管理とPDCAサイクルの活用による改善策の検討実施 ○担任者会における教職員の交流による取組の円滑な遂行 ○学校経営会議、三部会等を活用、教員の業務改善案を取り入れた業務改善の推進		○「1年のうち1月における時間外在校等時間が45時間を超える月数6月以内」の職員の割合		100%		84.6%	92.3%	88.0%	B	・時間外在校等時間が45時間を超える職員が、4月4名、5月2名、6月3名、7・9月1名である。10月以降は45時間を超える職員が1名である。時間外在校時間数については、減少している。教職員一人一人の体調や業務内容等を見ながら改善を図っていかなければならない。 ・行事や研修等と重なったりして、学校経営会議、担任者会等の日時設定を変更したり時間の確保が難しかったりする状況がある。		・主任層が見通しをもちながら各部会で相談しながら業務にあたったり、声を掛け合ったりする雰囲気があるのは小泉小の強みである。この強みを今後も継承していきたい。また、困っていることや悩んでいることを相談できる体制づくりにも取り組んでいく。 ・準備生委員会等、教職員の状況を互いに把握したり改善できることはないか考えたりして、組織力の向上にも継続して取り組んでいく。 ・年間の行事予定を考える際に、確実に時間を確保できるよう各主任層等と連携を図りながら計画する。		○			・教職員同士が相談しあえる関係性を大切にして、児童と向き合ってほしい。 ・先生方が健康であることが大切。今後も全教職員で「業務改善の余地」を検討して超過勤務が減少する取組を推進してほしい。そして、教師力向上のための自己啓発の時間がとれることを期待する。

【I: 自己評価 評価】
A: 100% (目標達成)
C: 60% (もう少し) < 80%

B: 80% (ほぼ達成) < 100%
D: (できていない) < 60%

【II: 学校関係者評価 評価】
イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。
ハ: 分からない。